

---

# **となりの場所と交わるとき**

西野了

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

となりの場所と交わるとき

### 【著者名】

NZマーク

### 【作者名】

西野了

### 【あらすじ】

短編小説の連載です。

## タクシードライバーのボヘミアン・ラブソング

気がつくとイタリアン・レストランの店内にいた。白いテーブルの前に座っている。ちょうど茹で上がったパスタがテーブルに置かれたところだ。しかしその瞬間、店内は暗闇に包まれた。店内に流れていたバロック音楽も聞こえなくなつた。

「火事だ！」

どこからともなく、その声は聞こえた。

私は慌てて出口を捜す。だが闇に包まれた空間は迷路のようで、自分が今どこにいて、出口がどこにあるのかまつたくわからない。暗闇の中いくつもの黒い影がうろうろと彷徨ついている。

しかし、火事だと聞こえたが火の手はいつこうに確認できないし煙の嫌な匂いもない。あるのはただ暗闇だけだ。その暗闇もまったくの暗闇ではなく、どこからか明かりが漏れているようで人が動く姿が確認できる。

私は壁伝いに歩いていると突然駐輪場に出た。スラックスのポケットには自転車のキーと自動車のキーが入っている。私の家からこのレストランまでは相当な距離だ。自転車で来るのならば2時間以上かかるてしまう。しかし目の前には確かに私の自転車がある。3年前健康のために妻がプレゼントしていくれど、緑色の車体だ。休日には妻とともにサイクリングにでかけたりするのだ。けれども今私は疲れていた。体が泥のように重い。

私は自転車を利用するなどを諦めて駐車場に向かつた。そこには私の愛車トヨタセリカが待っているはずだ。しかしその前を黒いスリーブを着た背の高い男が立ちはだかった。髪の毛は短く、サングラスをかけているがその視線の鋭さは隠しようがない。鼻は異様に高く唇は薄い。（私はこの男を知っている！）私は本能的に体を強張らせた。

「あなた、疲れているようだから、私のタクシーでお帰りなさい」

男は有無を言わせぬ口調で私を国道に停めてある黒いリムジンまで引き連れていった。

予想したよりも車内は狭い印象だった。しかし目の前にはウイスキーのビンと氷が入った安物のグラスがあった。ウイスキーはサントリーレッドだった。

「家に帰るには1時間以上かかるので、音楽でもかけましょう」と運転席の男は言うとスピーカーからクイーンが流れてきた。私はこんな雰囲気の中、フレディ・マー・キュリーのボーカルを聴きたくなかった。ブライアン・メイの電子工学的なギターも聴きたくなかつた。この状況では無理な注文だが、チャット・ベーカーのトランペットが聞きたかった。いや50歩譲つて彼のボーカルでもよかつた。もちろん、そんなことは言うことができなかつた。

リムジンは音もなく夜の街を滑るように走っていく。私は落ち着かなく窓から外の景色を眺める。いつもの通勤途中に見る景色だ。「ご安心を、あなたが帰るべきところまで、ちゃんと送り届けてさしあげますよ」

男は抑揚のない声で言った。

「私はちゃんと礼節をわきまえている人間ですからねえ」

男は薄笑いを浮かべて楽しそうに言った。

私はその瞬間、この男どこで会つたのか思い出した。5年前妻と旅行をしたときに空港でひろつたタクシーの運転手だ。私の人生の中でこれほど粗暴で無神経で悪意を感じる運転はなかつた。家に着いたとき妻をぐつたりとして吐き気さえもようしていた。

私は怒りに震え「君の会社を訴えてやる！」と叫んだが、男は薄ら笑いを浮かべ「旅行の最後にいいスリルだった。チップもなしよ、ケツ！」と捨て台詞を吐いて去つていった。

「君はあのときの、ドライバー？」

「あなたのおかげで、私は職を失いましたからねえ」男はなぜか楽しそうに答えた。嘘だ！

私はあのとき妻の介抱で、男のことなどどうでもよかつたし、実際

に苦情なども男のタクシー会社に言つていない。

「私はタクシードライバーが天職でした」男はタバコを取り出し火をつけ、深々と煙を吸い込んだ。

「天職を失うと人間、哀れなもんです」男の吐き出したタバコの煙がなぜか私の座席まで流れてきた。

クイーンが「ボヘミアン・ラプソディ」を演奏し始めた。

「そろそろ時間のようですね」男はハンドルを大きく右に切った。突然あたりは暗闇に包まれた。今度の暗闇は100パーセントの闇だった。リムジンのハイビームも一瞬で暗黒に吸い込まれている。間違いない。この男は断崖絶壁をめがけて私としのタイプを敢行しようとしているのだ。見かけよりも手抜きのリムジンを使って。いつしか山道に入りリムジンの上下動が激しくなった。エンジンの回転音も上がっていく。男はよだれを垂らしながら「どうです。最高のスリルでしょう？」今日はチップいりませんよ。あはははは「っ」と狂ったように叫んでいる。崖の先まではあと僅かだ。

死へのダイブあと5メートル。  
「あなた！ あなた！」

「パパ！」

黒いリムジンが宙を舞つた。体が浮遊する感覚がした。

「あなた！」

「パパ！」

目を開けると、白い蛍光灯の光がやけに眩しかつた。僕の目に前には涙を浮かべた妻と安堵した娘の顔、それに微笑んでいる若い女性看護師の姿があつた。

「意識が回復したので、とりあえずひと安心ですな」  
僕の枕元に立っていた眼鏡をかけた医師が妻と娘にそう告げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8951y/>

---

となりの場所と交わるとき

2011年11月26日22時51分発行